

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

●兵庫教育大学 学校教育研究科

「小学校英語活動指導者・研究者の育成」の事例 <人社系>

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

インターンシップ科目の開講に関して、「小学校英語活動インターンシップ」では、近隣地域の協力校の確保が困難であった。また、「海外教育体験実習」においては、海外の受入大学との連絡・調整のほか、教職員による現地への学生引率にかなりの負担を要した。

苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

外国語活動は、学校現場にとって新しい教育的課題であるために、当初、協力校として「小学校英語活動インターンシップ」を履修する学生を受け入れてくれる学校が少なく、協力校の確保が難しかった。また、「海外教育体験実習」については、年度末の実施であったため、本学の入試時期と重なり、現地との連絡・調整や、現地まで学生を引率できる教職員の確保が困難だった。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

「小学校英語活動インターンシップ」については、本学教職大学院研究・連携推進センターの協力を得て、大学近隣の教育委員会を通じて、各学校への協力依頼を行った結果、インターンシップの実施に必要な協力校を確保することができた。また、「海外教育体験実習」については、プログラム支援期間中に雇用された特命教員を配置することで負担を軽減できたが、本プログラム支援が終了し、特命教員の雇用ができなくなった現在、教職員への負担が問題となっている。このことについては、本学全体の国際交流や学生の海外派遣の取組の中で検討する必要があると考える。

これらの科目は、国内外の教育現場で外国語教育を実践できる貴重な場として履修学生の意欲向上にもつながっているため、実施形態の検討・改善を優先的に図っていきたい。

●関西学院大学 文学研究科総合心理学専攻

「国際化社会に貢献する心理学実践家の養成」の事例 <人社系>

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

英語を母語とする特任助教による英語力強化プログラムについて、参加を希望する大学院生のスケジュール調整が困難であった。

また、初年度に採用した特任助教が急遽帰国したが、その後任に適切な人物を見つけることは出来なかった。

苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

大学院生はそれぞれの専門によって授業の履修形態はさまざまであった。英語強化プログラムは正規のカリキュラムとしては組み込まなかったため、時間割の空いている時間が揃わなかったのが原因であった。

助教の帰国は東日本大震災に伴う原発事故発生後、自身と家族の安全を確保したいと言う要望であったため、強く慰留することも出来なかった。また、残りの任期が短いことと、同じく安全上の理由により後任の適任者を見つけることが出来なかった。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

スケジュール調整は困難であったが、複数回のクラスを開講し、授業のない時間帯にも割り振ることにより、より多くの大学院生が受講できるよう努力した。

最終年度は国内で専門業者を厳選し、英語での口頭での意思疎通や学会などでのプレゼンテーションに関して同様の指導を委託することで、積極的に英語で情報発信する能力を向上させることができた。

《非公表プログラムの事例》

A. コースワークの充実・強化

①人材養成目的に沿った科目構成の整理

●事例 1

具体的に何を実施し、何が困難であったのか

コースワークは現代社会が大学院修了生に要求している能力を身に付けられるように構成したが、多くの学生がなぜそのような科目を履修しなければならないかを理解できていなかった。

苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか

実社会においてはある程度の幅広い専門知識が必要であることは複数回説明しているものの、学生は興味のない専門分野の科目を勉強しながらいないことと、一部の指導教員は自身の研究室での研究に役に立たない知識や技能の修得には前向きではないことで、しっかりと理解しようと思わなかったことが要因と考えられる。その結果、毎年それらの科目の継続には複数の教員から強固な反対意見が出された。

どのように対応し、そのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか

実社会では、大学院修了生にどのような能力を期待しているのかを企業等のアンケート結果などを示し複数回説明した。しかしながら、それらを履修していれば就職が良くなるわけではなく、幅広い専門知識修得と就職に直接結びつかないため、説得力あるものではないと思われた。大学院生や教員が日頃から実社会と頻繁に交流する仕組みをもっと構築することが必要であろう。以下に学生からの感想の例を示す。「有機を専攻している人にはいいと思うが、私のように有機から離れている人には非常につらい授業だった。」「今の自分の研究にどう結び付ければいいのかわからない講義でした。一般常識として考えればいいのでしょうか。」